

THE TAIWAN-BUNGEI

文藝臺灣

第二卷・第六號

6

定價三十銅

輯編聯藝文臺灣



大東信託株式會社

臺中・臺北・新竹・臺南

臺灣文藝 六月號 目次

無限否定と創造性

楊杏庭 (二)

ヘルマンヘツセのシツタルタに就いて 瀧坂陽之助 (九)

春と詩 廣金錯 陶淵明集に就て 謝萬安 (九)

詩に關するノオード翁 閻 批評家に寄す 陳垂映 (一五)

他其

想感

殘された手紙

水田皆雄

大震災 感想二三 杨達震災地へ 李賴祥 (五)

圓紗の目眺め 一文聯印 (五)

書一(詩)一翁 丘英二 吴天賞 岩井義雄 史民 (五)

巫永福 岩井鐵二 吳坤煌 川上夜詩子 楊俊儕 (五)

嵐吼 雷石榆 范治任 黃采煥 林生 郭一舟 (五)

雷石榆 范合隆 綠樹傳影 放浪兒 王丙 袁游河 林昌烈 (五)

歌詞別(上) 翁 垣光 一(四)

琴新 壇光 一(四)

復讐(前篇) 一オリヤン・ハーブ (五)

林吸 哥樟 (八)

奧様と音樂會 谷孫吉 (一四)

東京支部の提案 (四)

福佬話 郭一舟 (一三)

我所切望的詩歌 雷石榆 (三)

讀對臺灣新文學路線的一提案的感想 一浪音 (三)

隨筆 兩個朋友 雷石榆 (三)

詩無曉志士 少明守真 (三)

創想鄉秋 吳鴻爐 (三)

最後的一封信 湘月 (三)

理想廬人黨 謝萬安 (四)

創作五谷王 (四)

編輯後記

(五)

彰化の樂しい社交場

彰化公園前

不偏不黨
公是公非

カフェー パラダイス

臺中新報社

臺中市大正町二ノ四

振替口座臺灣四一七七番

電話一一七七番



無限否定と創造性

—ベルグソン、ハイデッガー、シエストフ

楊杏庭

生の盲目性と生の暗黒性とは意味を異にすると思ふ。ベルグソンは生の盲目性を主張する人であり、シエストフは生の暗黒性を見た人であつた。盲目性とはエラン・ヴィタルが鋭角的に疊延するに係らず、それは光明や結果の豫見をすることが出来ず、背後の生の衝動的逼迫に依り、促進されることを云ふのである。然し結果性の豫見が不可能であると云ふことは、目的性や合理的理念を必ずしも否定するものではなく、目的性が現實的生に内在しながらも、生の促進力は依然として盲目性であり、豫見が不可能である。目的性は現實的であり、同時に彼岸的であるが、盲目性は常に現實的に變異しつゝ而も豫測し得ない處に一面神祕性をも持つものである。然し盲目性が如何にして創造性に達することが出来るであらうか。盲目性とは生の創造性の一側面、否一属性に過ぎないかも知れない。即ち創造そのことが一種の盲目性であり、純粹持続の變化性が絶えざる新しい過程を進んで行くことにならない。ベルグソンの純粹持續論は、十年前に考へて見たところがあるが、今日又文壇でその流行を見るやうになつたので、ハイデッガーやディルタイなどを讀む毎に絶えず比較をする以外、その後私もあり考へて見なかつた。ジードは今日に至るまで、ベルグソン哲學を遵守した忠實な文學者で、彼は決して流行を追はなかつた。純粹持續の滲透性は、一種の連續であるが、然し變化であるからには一の狀態から他の狀態へ轉移することである故、同一狀態の反覆ではなくして創造して行く過程であるから、非連續性であるとも云へるので

ある。科學的な實在は一種の實在であつて、因果性を根據に持つのであるが、生の實在は、前者の同質性に對して、異質的に變化する。然しその變化の概念でさへ、科學の所謂因果的な變化では勿論ない。何故なれば科學は等量性や空間性を豫想しての變化である故に、創造性と云ふものを考へることが出來ないからである。然し異質性を本質とする生命の變異は常に創造性を持ち得るのは、後者が常に生成性とか、發展性とかを持つてゐるからである。ベルグソンの發展性に關する考へ方は、既にアリストートに類似するものがあるやうに思ひ、ヒボケメノンは或るもののがそこから生じ、解體し、さうしてそれらの生成は素材や物質と考へる。然し物質の中には、創造的因子が生成するものとして動いて居り、イデヤの促迫力、類的規定性が、素材の無規定性に組織と形態とを與へる。生成過程が未だ進行を開始しない間は、未だに現勢^{エキセル}的に存在せず、過程中の素質としては、然し既に潛勢的^{ダントン}に存在するのである。潛勢的にあるものは、外的原因に依つて、エネルガニアになる。

如上のアリストートの考へ方は、生成の概念にベルグソンの創造と類似し、又重要な差異があると思ふ。即ちベルグソンの進化の概念には、イデアの形式性や、類的規定性がないからである。然しこのことは、ベルグソンの重要な長所と共に缺點であると思ふのは、只無形態的な創造とは一體何を意味するであらうか。創造性そのものは成程無形態であらう。然し創造的所産は常にある形態を具へたもので、而もその形態は科學の所謂等量的な形態ではなく、純粹に意味的な形態たり得るのである。例へば、文學的作品の製作や、繪畫の描出、作曲などの如きは、何等かの意味に於て形態の統一性、形像、施律の統一性が形造られなければならない。創造的過程を力説するベルグソンは、その結果性や目的性の不可豫測と云ふ理由の下に、多くの考察を費さなかつたのは、彼の哲學の大きな缺點であると思ふ。ベルグソンは十數年前に一時流行したが、近時又復活したのは何故であるか。能動的に行爲するとか、行動派の理論づけとかは、あまりに本質的な内在關聯がないと思ふ。本來生物哲學的に考へるその本源に溯れば、行爲派とは相通するものがあるかも知れないが、種族の芽の分枝、その分枝からの生命流の發展は、アートルの所謂自然法の偶然性に似通ふところがあるが、能動性—少くとも意識的な行爲性に對しては寧ろ消極的な一面さへもあるのである。何故なれば、創造性と云ふことは、肯定的積極的

的で、一見考へられるやうであるが、ベルクソンの所謂創造性と云ふ考へ方は、無意識性であり、合理的な以節のもの、否合理的な自覺や意識は創造的躍進の最後の殘流であるに過ぎない。躍進は非常に積極的であるが、然しそれは、神祕的な閃光に過ぎない。創造は何等かの意味に於て活動を伴ふが、然し合理的に考へられたものではない。ベルグソンの考へ方は、然しロマンティックな所があつて、新浪漫派の人々となら、大いに共通する部面があると思ふのである。

暗黒面は無限否定ではない。絶対否定からは何等の積極性を見ることが出來ず、只絶望的な諦観である。然し諦観と云つても、印度哲學の意味に於ける解脱的な意義を全然持たない、否定の爲の否定である。それ故絶対否定の考へを主張するシエストフの考へ方は、ベルグソンとは全然對蹠的な兩端を爲してゐるのである。現實の生命は眞の生命に非ずして、假の生命で死と同然であるならば、眞生命は、現實の生命を否定する處にある。然らば現實の生命を否定した眞生命とは何者であるか。常識で云ふ死が却て眞生命になるのであるが、それは所謂虛無である。然し絶對的虛無を考へることは一體可能であらうか。絶對無は直ちに有に轉するとヘーゲルは考へたが、有と無とは、相對的に存在するもので、一方を否定することは、他方をも同時に否定してしまふ結果になるやうなシエストフの考へ方は、それ自身論理的に存在することは出來ないのである。他界主義に轉すれば、直ちに宗教の領域になつてしまふので、シエストフの考へ方は、虛無の肯定と云ふ意味から、宗教になると思ふのである。それは印度哲學とは相通する考へ方や厭世的な色調を持つてゐる點は、行詰つた文學青年の心に投する點があるのであらう。生命的實在、科學認識の實在性、社會生の一切を否定すれば、後に倒が残るであらうか。この點は、ハイデッガーの「存在と時間」(Sein und Zeit)の中の思想に多くの共通性があると思ふ。私は四年前にハイデッガーの右の著述を山内氏の叙述及び哲學講座で讀んだが、その後ハイデッガ^トにあまり興味を持たない私は、深く思索することをしなかつた。ハイデッガーの時間の構造論はデイルタウの時間の立て方の續行であるが、それよりは遙かに創意に満ち、深い思索に到達してゐるのであるが、私はハイデッガーをまだ一面的な哲學者だとしか考へない。

時の構造は、時間の時間性の時現、時の脫域性、時の未來からの時現、時の現實的な表現は有限性であると云ふ構造を

持つてゐる。さうしてこの時間の構造を分析するのがハイデッガーの哲學の全部であつて、その分析は専門的になるので、此處ではしないが、簡単に一言して見ようと思ふ。第二の時間の脱域性は、現存性、未來に興ぶる存在性、過去の廢棄性であり、關心構造の全體性、統一の可能性を原本的に構成する。敗傾性は疑義に依つて規定され、好奇心は未來的に、説話は現存的に、而もそれらは、ロゴスなる存在に於てである。ロゴス的な存在は企劃的であり、特に可能的なものが、その根底を爲してゐる。時間の未來性は現實に對して一の非存在であるが、然しそれは不存在ではなく、可能的存在的である。眞理性は可能的な領域に基づいて了解され、眞理の一義的に決定されるものとは異なる。現實的存在は有限的であり、可能的なものは、現實を離れて存在しないが、然しそれ自身二つのゲビットを爲し、却て無限に變容性を持ち、現實に對して根據的である。存在はそのロゴス性に於て自己を開示すると共に、自己を覆ひかくさうとする隠された存在は吾々を欺き易いロゴスであり、吾々の見誤まれた眞理である。このロゴスの開示性と隠蔽性は、印度の六派哲學の確か吠壇多派にもさうした考へ方が千年前にあるが、ハイデッガーにもそれに類似した考へがあるやうに思ふ。現實の如何なる場面も眞偽、明暗、假現、近遠とを持つてゐて、それ故に不安で不確實である。只それが眞と偽とを共に含み、それが却て可能的なものに根據し、眞理性はそれ故にその可能的なものに根源を持つてゐるのである。

ハイデッガーの不安及び廢傾性、明暗の考へ方はシエストフのそれに似通ふ點があると思ふのであるが、シエストフは、革命前のロシャ帝政の下に於ける社會的桎梏に對する絶望的な暗黒を反照せるものであると云はれ、ハイデッガーの不安は、戰後のドイツの社會的、國家的崩壊の不安の爲めだと云はれてゐるが、眞理性をさうした外的偶然に依つて規定することを私はあまり嘗て表しないものであるが、シエストフは純粹の意味に於ける哲學者ではなく、寧ろ文學者か思想家の部類であらう。ハイデッガーはその意味に於て創意に満ちた考へ方をしてゐるが、現象學のフツセールの弟子でありながら、師說を一蹴して却つてデイルタイに共鳴した小壯な銳敏さと聰明さとを見ても、彼が時代に敏感であることは否まらない事實であつかも知れない。デイルタイなどは最初に小説を書いたほどの人で、ゲーテ、ルツソーアウグステスの傳記や文學作品の評論が多く、一晩にヘルグリンの哲學のやうに共通點を持ち、それ故にハイデッガーもベルケソンの

生命的時間性の考へ方に類似する處が多いやうと思はれる。是等の比較は多岐であるから、今はその餘裕を持たない。只私が、デイルタイの (Gesammelte Schriften, VII Band) 中に、(innemeren, Realiteit; Zeit, Der Zusammenhang des Lebens, Die Seinsbiographie) の中に、時間に對する考へ方が、常識的であるが、ハイデッガーの先驅を爲し、多くの暗示を與へてゐることを發見し、次の「生命の闘聯」ではゲーテやルツソーアの懺悔錄に對する評論を試みてゐるのが面白かつたのである。(Die hohen Formen des Verstehens, Das musikalische Verstehen) 「理解の最高形式」と云ふ章では演劇の評論や後者の「音樂的理會」は音樂論であるのを見て、デイルタイは實に豊富な、それと同時に曖昧な哲學者であると思つた。獨逸人は全國民が音樂に對して深い理會を持つてゐる故、哲學者が音樂論をするのは敢て驚嘆する程ではないが、親しみの持てる哲學者だと思つたのである。是等の文論評論は古曲的な研究に屬するもので、此處に紹介するのは此の小稿の目的でない故、省略する。

最後に私の所謂無限否定と創造との關係について一言しようと思ふ。無限否定とは、生の創造過程を絶えず否定することで、より高き段階から、低次の段階を否定することを意味する。低次の段階の否定を経ない限り、生は進歩しない故、無限否定とは進歩を意味し、創造の不可缺的な要件である。否定の爲めの否定ではなく、肯定的一面に於て否定を豫想するのであつて、無限否定は常に高次への無限肯定である。無限否定は、ハイデッガーに從ふならば、常に可能界へ高揚して行く處のものであり、永遠への創造性を可能ならしめるのである。シエストフの所謂絶対否定は、道德、科學、藝術、政治、社會、歷史の一切及び生命をも否定するのであるから、絕對虛無の考へに到達せざるを得ないのである。絶対否定は自殺を意味するが、無限否定は、一切を否定しても、極限に一つのものを残すのである。一つを残せると云ふことは、他の一切をも遂に否定せざるを得ない故、無限肯定へと變化して行くのである。

全體暗黒とは何であるか。暗黒の種々の動因を爲すものは、それを生の内在的要素に求めてか、或は之を外在的な條件に置くのであるか。若しも暗黒の本質性が、生の必然的内存性にあるとすれば、暗黒の世界は更により多く根據的であると思ふ。だが暗黒の動因が外在的な諸條件に依存するとすれば、それは偶然的であらう。暗黒の世界透視は一種の

論であるが、絶對的懷疑論それ自身成立しないやうに、絶對的な暗黒世界も成立し得ないと思ふ。暗黒の透過は、その彼岸に一つの光明界へと轉するのであるまいか。否、光明界の成立は暗黒面と相矛盾することに依つて存立するのである。絶對的光明はそれ故にあり得ないと云ふ結論になるのであるが、同時に佛教哲學の所謂解的統一は成立しないことになる。但し龍樹の空觀は、ハイデッガーの可能界に該當するものであつて、それは靜的光明でもなく、絶對的虛無でもない、進化と創造とを絶えず可能ならしむる根據であると思ふ。阿賴耶識がフツセールの純粹意識に似た考へ方があるが、非常に興味深い大乘思想であらうと思ふ。

後記

私は右の小稿を筆に任せて書いた粗笨なものである。思索の飛躍、及び難澁粗漏な點があらうと思ふから、編纂者の都合で、掲載しないでもかまはない。私は今獨逸語を滋々と讀んでゐる一老書生である。私の現在の語學に對する苦い經驗から、臺灣の讀者諸士、及び語學を學びつゝある有爲なる青年諸氏に一言の忠告を呈したいと思ふ。言語學は二十五歳を過ぐれば、效果はほとんど半減すると云つてよい。私は今才度満二十五歳と八箇月の老書生で、心理學的法則に依れば記憶力の減退する時期なのである。それを今年から、更にフランス語を初めると云ふ仕事で、苦しんで學んでも效果は上らないのは云ふまでもない。始まつたつて始まらないのが、始めないと尙更始まらんから、是から始めようと思ふ。是が老書生の嘆きである。もう二、三年前早く上京すれば、いゝと後悔するのであるが、今更後悔したつて始まらないのだ。それで二十五歳以前の青年諸士は、前車の轍を履まないやうに懸命に努力せられんことを希望して止まない。私がフランス語を學びたいのは、フランス文學を少し讀んで見たいからである。三年前に、牛箇年かゝつて、新潮社の世界文學全集の中から、フランス文學を十冊内外一纏めに讀んで見たが、從前讀んだ獨逸ものや北歐もの、ロシヤ文學とを頭の中で比較して見て、やはり私はフランス文學が一番好きであつた。然し私は、ジイドやバルザックのものは殆んど讀んでゐない。ジイドは二つばかり讀んだが、それではまだジイドが分るものではない。二、三年後には、佛文と譯文とを對照し

て、又澁々とよらるのかも知れない。英語は十年、獨逸語は一年、フランス語も一年あれば讀める。獨逸語を二年やつて讀めない人は、きっとなまけた人に違ひない。それが普通なのであるから、私は英文學は去年まで一つも知らない。英語が讀めるやうになつてから、英文學を少し讀んで見よ」と思つて、その他の翻譯文學ばかり從前は讀んだのであるから、去年少しづゝシェークスピアを讀んで見、が、是も澁々で、五遍六遍ちやきかない。十週二十遍練返して讀まないと、力がつかなくなつた老書生である。是も嘆きの一つである。ものと若い頃なら、憶え易いものを、つくり、嘆息を吐くのだ。去年ビツカーリング氏と云ふ英國の代議士の英文學史の講義をきいて、著名な英國の文學者の代表著だけ讀んでも、是は「生涯かゝると思つて、又嘆きを重ねたのだ。是から又二年間英文學史をきくのであるが、それは只アウトラインだけで、何にもならない。フランス語を學ぶ直接の動機は、トーマス氏と云ふ英國人が教へてゐるので、發音も比較的正しく、英語で講義するから兩國語の耳の練習になるので、一舉兩得である。どつとも完成しないと、あぶはち取らずで、一舉兩失になるかも知れないと何時も思つてゐるが、何しろ老人であるから、やることに疎なことがありやしない。おまけに神經衰弱ときてゐるので、尙更物憶えが悪い。朝に憶えて夕には忘れる。夕方に憶えると翌朝には忘れる。缺伸を一つすると、五里霧中の遙けき彼方にすつと消えて行く。老書生の感慨此處に至るや、慘めなものである。然しひトーマス氏はシェークスピアの劇を指導する敏感な先生である。私に出逢ふと、時々向ふから先に拶挨拶するのだ。私はその都度に恐縮し、周章て返禮すると、トーマス先生の姿はもう見えない。帽子を被つたことのない神經質な、而も怠惰者で、僕には特に親切してくれる。僕はトーマス氏の時間には比較的熱心に出席するせいか、又は共に遠郷の地から來たせいか知らないが、修辭學のプリントを分ける時は何時も真先に僕のところへ来て、何とか片言僕に問ひをかけて、面喰はせたりする。僕の老書生振りに拘らず、僕を見ること、さながら尋常一年生を扱ふが如しであるのだ。尤も今年からフランス語の尋常一年になるのであるが、ミスター、ヨーと僕の肩を叩いて、何とか愛嬌やすねごとをつけて逃げるのである。僕はフランス文學は好きだが、フランス人は嫌ひです。殊にフランスの娘、パリチヤンは嫌ひです。アメリカ人も嫌ひです。アメリカのギャルも同様に嫌ひなのだ。理由は大いにあるだが今は云はない。

僕は文學を語る資格はまだない。流行をあまり追はない私は、一月二月後れの「改造」にある評判の傑作だけ讀んだりする。一年に十數篇しか讀まないし、讀む時間がない。大抵文藝評論家がいゝと云つてから、僕は狼狽てゝよむのである。私は六箇月間哲學を學び、その後二三年間語學や文學やらをこた／＼讀んで、今は纏つたものが云へない。五年後、十年後には少し、否うんと云へるかも知れない。臺灣の人の作品で、剽窃にいゝ作品だと思ったのは、呂蘇若氏の「牛車」であつた。

私は七年前にベルグソンの創造的進化を始めてよんだ。尤もそれ以前は梗概をよんでも知つてゐるのであるが、それを一夜つめ込みで、龍泉の片田舎で讀んだ。半部しか分らないし、虚勢なども手傳つたり、瘦我慢をしたりして讀んだが、詩を讀むやうであつた。哲學書をまとめて、よんだのはその時始めてであるが、その後何もよまなかつた。

ハイデッガーについて一言する。ハイデッガーは背の低い哲學者で、外齒であるらしい。ニツカボーカーのズボンを着てスキーなぞに出掛け、大學生と尻餅をついたりするのだ。風呂敷のやうなネクタイを結んで、頭は剃刀のやうに鋭く自分の書いた「時間と存在」とは出版後一度も自分で讀んだことがないと云ふ。世界の少壯哲學徒が、それを大事さうに擔ぎ廻してゐるのに自分では讀む氣さへしないつまらぬものだと云つて、高をくゝつて平然と講義に出掛ける自分の考へが今もう變つてゐると云ふ。一寸人を馬鹿にしてゐる生意氣な哲學者である。その二冊の書物を改訂するとか云つて、まだ一寸も手をつけてゐないらしいが、もう改訂したかも知れない。私はハイデッガーはあまり好かない。ニコライ・ハルトマンの方が適當で好きだ。すつと前から好きである。それは、私の今までの思素の態度が比較的ハルトマンに近いからである。

東京に世界一のピアニスト・アルトル・ルーピンシュタインが來てゐる。四五回リサイタルをすましたが、私は「シヨツパンの夕」に出席しようと思ふ。去年原智恵子娘やクロイツァーのリサイタルをきいて、死にさうになつて死に損つたが今度も死にさうな目に逢ふかも知れない。ベートヴェンの交響曲なぞをきいて、私は何時も眼が潤んで來るのであるが、神經衰弱のせいであらうかと思ふ。私もレージ・ボイの類で、気が向かないと、かゝないので是で筆を擱く。

(一九三五・四・八)



ヘルマンヘツセの

「シツタルタ」に就いて

瀧坂陽之助

がオーストリとセルビヤの葛藤に端を發して、彼の歐洲大戦とはなつた。そして科學文化の進歩願しきだけに、それだけ其處に演ぜられた慘激は倍加せられた。

斯くて、西歐物質文明の惡弊缺陷は、遺憾なく暴露せられたのである。白人謡歌の夢は破れ、物質文明科學文化の、遂に人間を教ひ得ざることを、まさ／＼と現實に味はしめた。そして今迄の白人心醉の夢より醒めた彼等は、東洋思想、分ても佛教思想、儒教思想等の東洋文化の根底をなすこれら的精神思想に、着眼し、研究し始めた。分ても、獨逸於いては、眞剣に研究に意を費がれた。只さへ瞑想的哲學的な獨逸國民が、世戰國として、土地は割かれ、軍備は他國より制限せられて、あらゆる自由を掣肘されたのであるから、精神生活に眼を向け來つたことは、當然の歸路